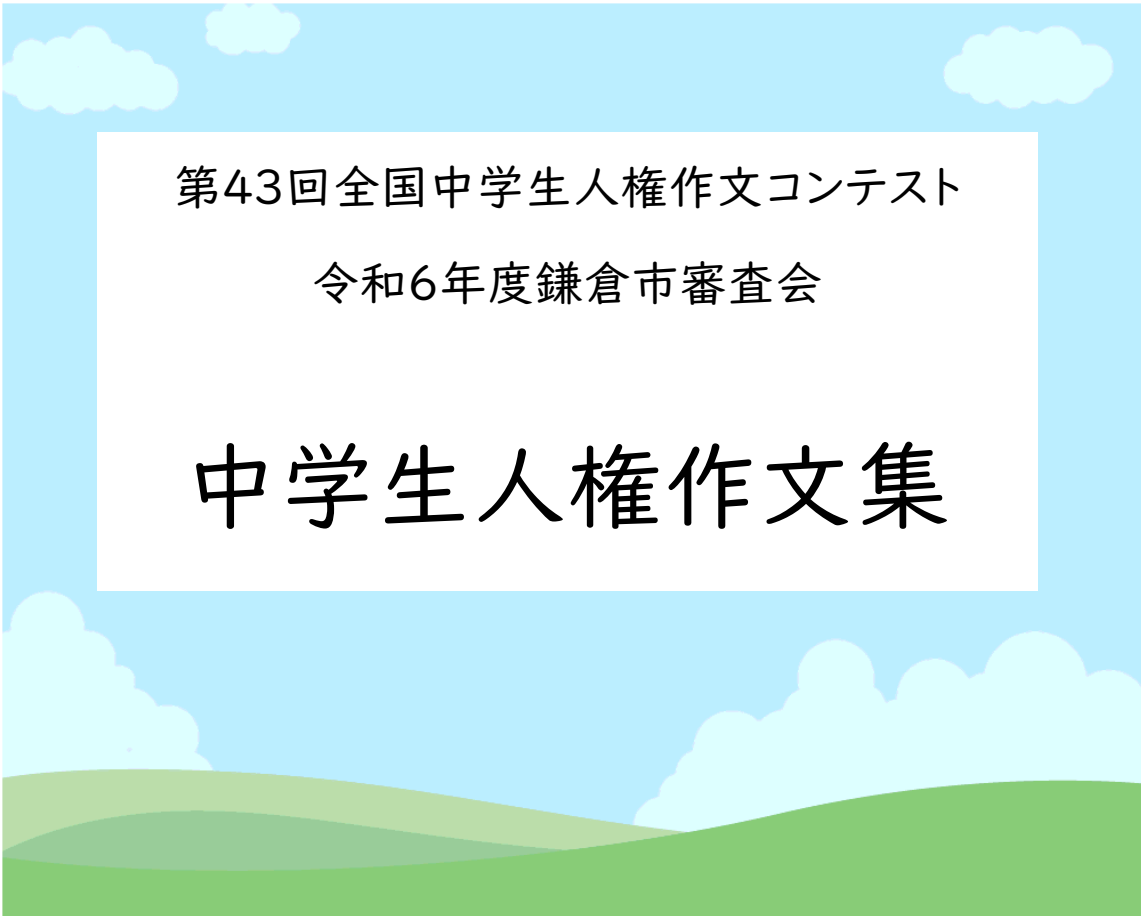




第43回全国中学生人権作文コンテスト

令和6年度鎌倉市審査会

中学生人権作文集

鎌倉市人権擁護委員会

目次

人権作文集の発行にあたって

鎌倉市人権擁護委員

加藤 三恵子

..... 1

鎌倉市長賞

私だから言えること

鎌倉市立玉縄中学校

三年 柊木野 咲月 2

見えない人権 保育体験より

鎌倉市立第一中学校

三年 小野 忠瑛 4

考え方

鎌倉市立第一中学校

三年 上原 慈雄 6

「身近にあった人権問題」

鎌倉市立第一中学校

三年 丹呉 理桜 8

「偏見」

鎌倉市立岩瀬中学校

三年 金井 葵海 10

鎌倉市教育委員会賞

三人の自分

鎌倉市立第一中学校

三年 佐藤 功己 12

誰もが幸せになるために

鎌倉市立岩瀬中学校

三年 実藤 直生 14

「身近な差別」

鎌倉市立岩瀬中学校

三年 伴 奈美 16

鎌倉市人権擁護委員会会長賞

助け合いで作れる人権

鎌倉市立深沢中学校

三年 鈴木海晴

.....

18

多様性の必要性

鎌倉市立第一中学校

三年 中島奈海

.....

20

向日葵から学ぶこと

鎌倉市立深沢中学校

三年 齊藤小春

.....

22

鎌倉市人権擁護委員会奨励賞一覧

.....

24

第43回全国中学生人権作文コンテスト鎌倉市審査会入賞者表彰式

.....

25

人権擁護委員とは

.....

26

第四十三回全国中学生人権作文コンテスト鎌倉市審査会

人権作文集の発行にあたって

鎌倉市人権擁護委員 加藤 三恵子

【更なる応募を、期待しております】

全国中学生人権作文コンテストは、法務省と全国人権擁護委員連合会で、人権尊重の大切さや基本的人権についての理解を深め、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的として、昭和五十六年（一九八一年）から実施しており、今年で四十三回目を迎えました。

本年度は、鎌倉市内の市立中学校六校から二二一編の作文が寄せられました。

内容は、「障がいのある人のこと」「いじめ」「差別」「戦争」「外国人の人権問題」「LGBTQ」「SNS」等をテーマにしている作品が多く、日常生活や学校生活を始め国際社会へ至るまで、多岐にわたっております。自分の考えがしっかりとまとめられていて、率直な意見や考えに心打たれる作文がたくさんありました。また人権尊重に対して積極的に行動なさっていることも、頼もしく感じました。

今年は昨年と比べ、応募数が二倍以上となりましたことを喜ばしく思っております。次年度は更に多くの応募を、お待ちしております。

鎌倉市審査会で、市長賞を受賞された五作品を湘南地区大会へと推薦いたしましたところ、鎌倉市からの作文のうち銀賞一作品の入賞が決定し、神奈川県大会へと推薦されました。そして神奈川県大会で銀賞を受賞することができ、心弾む結果となりました。私たち鎌倉市人権擁護委員十四名が全作文を丁寧に読み、議論を重ね選ばせていただいたものが、この作文集に載っています。

社会では、国内外を問わず人権問題が起こっています。中学生の皆さんは豊かな感性を通して、様々な差別や偏見に気づいています。

お互いの人権を尊重するためには、どうしたら良いかを考えることができる作文集です。

作文を書いたことにより、人権を改めて考え直すきっかけにもなったのではないかと思います。

これからも、あらゆる体験の中で、自分を取り巻く方々を、思いやる気持ちの大切さを学び・考え・持ち続けてくださることでしょう。

中学生の瑞々しい感性や問題提起を、私たち人権擁護委員は真摯に受けとめ、今後の活動に生かしてまいります。

最後に、応募いただきました中学生の皆さん、ご協力くださいました学校及び先生方、ご家庭の皆様にご心から御礼を申し上げます。

鎌倉市長賞

神奈川県大会銀賞・湘南地区大会銀賞

私だから言えること

鎌倉市立玉縄中学校 三年

柊木野 咲月

“吃音症”それは「流暢さと発語の流れに頻繁に問題を伴う言語障害」である。

人権についての作文と聞き、テーマを何にするかと考えた時、私は自分自身のことを書こうと決めた。

私は吃音症だ。吃音症にも三種類があつて、私はそのうちの一つ、頭の文字を繰り返してしまう、「難発性吃音」である。

違和感を覚え始めたのは保育園年長の頃、それまで難なく発せられていた言葉たちが急に「あ：あ：」と喉あたりで詰まるようになった。人と話すことが大好きだった私にとって、それはあまりにも悲しいことだった。

症状が本格化し始めたのは小学生になってからだ。保育園の頃と違い、明らかに人と触れ合い、自らを発信していく機会が増えた小学生時代。しかし、吃音症と共に生活するのは、苦難の連続だった。楽しくお喋りしようにも、教科書を音読するにも、人前で何か発表するにも、日々吃音という障害が付き纏い、伝えたいことが伝えられない、伝わらない。特に、人前で話す

際は、その順番が迫るにつれ「吃ったら恥ずかしい」と不安と緊張で激しい動悸と大量の汗、体温の上昇など身体にも影響を及ぼし、いざ吃つたとなると悔しさと悲しさで頭がいっぱいになるのだ。学年全員が揃う卒業式の予行練習では、体育館の中央で名前を言う場面で、ぽつんと独り立ち尽くし、そのまま黙り込んでしまった、という経験もある。「私以外のみんなは流暢に話せているのに、なぜ私だけなんだ」と、強い孤独と悲しみを抱き、“変だ”と笑われ、泣いてしまう日もあった。

中学生となった今。幸いなことに、友だちや家族に恵まれ、最近では症状はなくなりつつある。やがて、私と同じように吃音症で悩んでいる人について知りたいと思うようになり、YouTubeで調べてみると、“注文に時間がかかるカフェ”という見出しを見つけた。動画を開いてみて目に映ったのは、吃りながらも一生懸命接客する店員さんと、店員さんが話し終わるまで待っていてくれるお客さん。これはいったいどういうことなのだろう。

動画を見進めっていると、このカフェは接客業の夢を諦めていた吃音の若者たちの夢を叶える、吃音をもつ女性が生み出した企画であることが分かった。動画内に映る接客中の女性はもと

もと人と話すことが大好きだったが、吃音に悩まされ、人と極力接しない仕事を選んでいたのでそう。私は、接客が終了した後、その人が発した、「今までの人生の中で本当にチャレンジをしてこなくて。吃音症の自分でもやりたいことができるんだ」と思えてほんとに良い機会です。ここまで正直生きられると思っていなかったんです。こんなに報われる日がくると思っていなかったの。」という言葉が胸に刺さった。人と話すことが大好きだったが、吃音を理由に、人生の中でチャレンジをしてこなかった彼女。それは、人と話すことが大好きだったが吃音が故に人前に立って目立つことを避けていた自分の境遇とあまりにも似ていたからだ。他にも調べてみると、就活の際吃音を理由に面接官に笑われ、何件も断わられている人がいるということも分かった。

人権とは、「誰もが生まれながらにして持っている、人間として幸せに生きていくための権利」だ。しかし、吃音など、少しでも周りと違うだけで就活難を強いられるなど生きづらい世の中だと感じてしまう人がいるのは、いかななものか。私はそのような人のことを、世間の人々がたとえ「理解」できなくとも、「こういう人たちもいるんだな」と「認知」してくれた

らなと考える。全ての人々が、自分らしく好きなように生きていける、そんな社会が実ることを、私は願っている。

鎌倉市長賞

湘南地区大会奨励賞

見えない人権 保育体験より

鎌倉市立第一中学校 三年

小野 忠瑛

中学二年生の時に、授業の一環で「保育体験」をしました。卒園した幼稚園に連絡を取り、一日の流れや注意事項などを聞き園児たちへのクイズイベントについて準備をしました。当日、数時間ではありましたが当時園児だった私の気持ちを思い出し、また中二の私を感じた先生と園児の気持ちを大切に接しようと思いました。

実際には私たちが考えていたようにはクイズのイベントは時間通りには進みませんでした。想像を超える園児たちの自由な言動に翻弄されました。ひとりひとりちがう子だから丁寧に触れ合うことを意識して過ごしました。私に幼稚園児のころの様々な記憶があるように体験の日に出会った園児にとって良い記憶にも悪い記憶にもなる可能性のある時間を大切にしたいと強く感じていました。というのも私は幼稚園が苦手でした。十二月生まれだからか、姉が二人いるせいか、しゃべらなくても不自由がなかった生活から同じ年に生まれた集団にいれられたという事がとても恐怖を感じたのです。同じクラスの子は

私より大きくよく話し積極的な子ばかりでした。幼稚園に行きたくなくて下駄箱で上履きを外になげて入りたくないアピールをしていた私に先生は新技だね。と怒らず何度も取りに走ってくれました。私が好きなウルトラマンのカラータイマーを作りし一緒に遊んでくれたりもしました。このように先生は私のペースを確保してくれました。私の行きたくない気持ち、心配な気持ち、色々できないという言葉に表せない気持ちをいつも笑顔で待っていてくれました。「待つこと」これが当時、私は分かりませんでした。「人権を守る」ということだったのではないかと思いました。先生の中には同じことができないと、怒る先生、せっかちな先生もいました。当時は怖くてその先生には近づかないようにしていたほどです。小さいけど、伝えられないけれど幼稚園児だって色々考えています。ジャングルジムの上からみんなのことをみていた景色は今もよく覚えています。ルールを守る、友達が嫌がることはしない。相手がどんな気持ちかを考えてみようという集団生活ができることが幼稚園

生活のメインかと思っていきましたが「みんな違ってみんないい」という歌があるように不自由な幼児の時期にあなたはあなたで大丈夫とそのままのあなたでみんなと過ごしていいのだと教えてあげることが大切でその時に理解できなくても声に出し伝え続けてくれたことが先生がしてくれた人権教育だと思います。年長クラスになるとお稚児行列の先頭を任せました。私の後ろにはクラスメイトがついてくるのです。とても緊張しましたが先生の「あなたならできる」という後押しで順序を守り、工程をこなした時の達成感とほめられたことはとてもうれしかったです。

発達が遅い、好き嫌いがある、会話がかみ合わない。集団生活を学ぶ場なので手のかかる子につきつきりでつけないこともあると思います。目に見えない人権、目に見えない人権の尊重という小さいうちから自分のなかにある人権という風船を大きく膨らませてあげる環境が大切なのではないかと思いました。

保育体験は本当に沢山の学びがありました。クイズをする、ボール遊びをするという大人にとっては簡単なことも感情の出発地点が大人とは違うことを思い出させてくれました。

これから「人権を守る」なんていうと堅苦しいけれど、話しやすい人、近くにいてくれる人に寄りそえる人になりたいと保育体験を通して感じました。

これからの人生色々な人に出会うことになるはずです。その

時々の環境でみんな個性があり人権があり、特徴、差があるのが当たり前だと理解、想像して、自分を大切にしてそばにいてくれる人を大切に接することが人権を守ることなのだと思います。

鎌倉市長賞

湘南地区大会奨励賞

考え方

鎌倉市立第一中学校 三年

上原 慈雄

ときどき、障がいを持っている人と同じ電車に乗ることがある。突然「あ」や「わ」などの一言が、誰も声を発していない電車内に響き渡り、その声をきっかけに冷たい視線を向けて隣の車両に移る人がいる。私はその行動を見て胸が締め付けられるような感覚がした。確かに突然大きな声が電車内に響くと自分も驚いてしまうがなぜ同じ人権がある人間なのに、大きな声を我慢できない障がいの人が発しただけで同じ空間を避けるのかに、疑問を感じた。

私が小学生のときに、障がいを持ったA君という子が同じ学年にいた。A君は低学年のときは普段、特別支援学級にいたが、図工や特活などの勉強に関わらない授業をしているときはみんなと同じクラスにいた。しかし、みんなと関わるとつい楽しくなってしまう、相手の髪を引っ張ったり物を壊してしまったりしてしまうことがあり、みんなから怖がられるようになってしまった。それでも学校の先生や特別支援学級の先生たちのおかげでA君は前と変わらずみんなと学校生活を送ることがで

きていた。

けれどもある日、大きな出来事があった。それは誰かが自分のハサミを机の上に出していたことが原因で、そのハサミを持ったA君が教室内で振り回すという出来事があった。この出来事は完全にA君が悪いわけではなく、ハサミを出していた子にも非があるため、クラスでは「物を使い終わったら机の中に戻す」というルールができた。このルールは、私がA君に何かをする初めてのことであったので、このことをきっかけにA君のことを少しでも考えるようになったが、私は正直A君が怖かった。なぜなら、前に起きた髪を引っ張ったり物を壊したりすることは、小学生の力だったためあまり自分は気にしていなかったが、ハサミは大きな傷をつけることができる武器にもなり得る物だったから、「自分が傷つけられたらどうしよう」などネガティブなことを考えていた。そんなある日、クラスで席替えがあった。みんなは新しい席で教室がにぎやかな反面、私は不安だった。なぜなら、A君の前の席になったからだ。しかし、

私は近くになったからには少しだけ関わってみようと、後ろを向いてA君に手を振ってみた。そうすると、A君も手を振り返してくれた。私は手なんか振ってくれないだろうと思っていたから、とても驚いたしとても嬉しかった。このことを皮切りに私は何度も手を振ってみて、ときには話しかけたりもした。何度もやっているのだんだん「怖い」という気持ちが晴れるようになっていき、この出来事が私の障がい者に対する考え方が大きく変わった日だと思う。

そしてみんなは、高学年になるにつれて心が落ち着いていき、A君にする対応も変化していった。特別支援学級の先生がいなくても、面倒を見てくれたりする子が低学年の頃からいたが、その人数が増えていったりもしていた。そのような日々が続いて、ついに私たちは小学校の最高学年である6年生になった。私たちは、コロナウイルスが原因で、小学5年生で行く予定だった宿泊学習が中止になってしまったため、修学旅行をより一層楽しみにしていた。ただ、修学旅行だから班決めはとも時間がかかり、それもA君をどこに入れるのか班の中で話し合っていた。けれども、私の班はすぐに満場一致で「A君を入れても大丈夫」という結論に至ったので、A君を歓迎することにした。寝るときは別々でも当日は部屋の中でA君とともに班のみんなで楽しんだ。最後の卒業遠足でもたまたま私はA君と同じ班になった。A君のために班でメリーゴーランドを待っていると特別支援学級の先生に班全員感謝された。けれども、班の全

員が照れていた嬉しんだりしていなかった。なぜなら、みんなは別に感謝してもらいたくてA君と同じ班になったわけではないのだから。

人権は人間が生まれながら持っている当然の権利だが、たまにこの人権を否定してくる人も世の中にいる。私は小学校の経験が人権に対する考え方に影響しているが、このような経験のない人たちにはどう考えさせられることができるか。身近にも電車の中で冷たい視線を送り、隣の車両に移動する人が現状にいる。そのような人たちをどう減らせるかは今後、考えていかなければいけないことだと私は思う。

鎌倉市長賞

湘南地区大会奨励賞

「身近にあった人権問題」

鎌倉市立第一中学校 三年

丹呉 理桜

「え。それ、何？」と私が聞くとA子はたった一言「リスカ。」と答えました。当時の私はリストカットというものを全く知らず、痛くないのかな。と無邪気なことを考えながら、「どうしてそんなことするの？」と尋ねてみました。するとA子は、「親とケンカして、姉にも馬鹿にされた。」と言いました。そして私は、「そんなことぞ？」と言つてしまいました。ところがその言葉が間違つていたようで、A子は顔をしかめ、怒つたように「私にとつてはそんなことじゃないの。」と言いました。しかし私は、親とケンカなんてどこの家でも少なからず起きるだろうし、兄弟がいれば、馬鹿になつてそんな大したことじゃないだろうと軽く思つていました。それでも私はA子が嫌な思いをしたなあと思ひ、「ごめんね。」と謝りました。そしてA子に聞きました。「ケンカつて口ゲンカ？」と。ところがA子の回答は「違う。」の一言。私はA子は何を言つていいのか理解が追いつきませんでした。私の中の親子ゲンカは、口ゲンカと勝手に思い込んでいて、自分の子どもに暴力をふるうなんて信じ

られませんでした。それでも私は、「ひどいことをする親もいるんだなあ。」とそんなに重く受けとめていませんでした。

私は最近、夜にニュースを見ることが多くなりました。そこで時々、「トー横」について取り上げられていて、トー横には沢山の未成年が集まっています。その子どもたちの中には親による暴力が嫌で逃げてきた。という子が多々います。そしてその子どもたちの中には、自殺までしてしまうという子もいて、私は驚きました。しかし私は、前に述べたA子のことを思い出して、あの子ども親に暴力をふるわれていて、苦しかったからリスカをしたのかもしれない。と思ひ、あの頃の私のん気さを後悔しました。何か一言ぐらい言えばよかったのに。相談に乗ればよかったのに。と。そんなA子が今、どうしているかは分かりません。でも辛さは少しなら分かる気がします。

小学校六年生の頃、私は中学校受験をしました。しかしそれ自体、私はやりたくありませんでした。なので当然私は落ちました。その可否通知が来た頃ぐらいから、母は私への当たりが

少し強くなり、弟からは中学校受験をだしに馬鹿にされるよう

になりました。以前の私は兄弟からの馬鹿には大したことない。

そう思っていました。が、現実そんなことはありませんでした。

実際に馬鹿にされてみると、本当に傷付くし、何よりもムカムカします。その理由は恐らく、自分たちは対等な関係。お互い

同じ子ども。なのになぜ自分が下に見られているのだろう。と

いう思いがあるからです。また親からは、少しのことでかなり怒られとても理不尽だと思ってしまう。そして、それらが

積み重なるとかなりメンタルがやられます。しかし、その出来事は家の中のこと。他人になかなか言えるはずがありません。

それなのに私は、頑張って話してくれたであろうA子に全く共感してあげることができませんでした。それにA子は暴力まで

ふるわれていたのに。それは怒っても当然です。A子は、自分の親から家庭内暴力を受け、姉からは精神的苦痛と心身共に傷

付けられていました。今の私でもA子が受けていたものと私が受けていたものとはかなり大きな差があり痛みを充分に分

かることができません。それでも私は、一人だけ味方がいて、一人でも味方がいるととても安心することができました。A子

の場合は、その味方が私になるはずだったのでしよう。今、ト

ー横に集っている子どもたちはその味方がなくて、行き場がないからそこに集っているのだろうと思います。だから私は、A

子との出来事の後悔をバネに少しでも親身になって話を聞き痛みを分かち合い、一人でも多くの味方になれたらいいと思

います。

人権と聞いて始めあまりピンと来なかった私でも、思い返し

てみればとても大切な経験をしていて、社会では、人権にまつ

わることで多くの社会問題を抱えています。そして、その中の1つが家庭内暴力であり、今回私が書いた経験そのものだと思います。日本では、「トー横キッズ」が社会問題になっていて、

その子どもたちの多くが家庭内暴力によって苦しんでいます。私はそんな子どもたちの味方となれるようにしっかりと話を聞

き、一人でも多くの子の痛みを分かるようになりたいと思います。人権とはそんなに遠い話ではなく、見渡してみると意外と

自分の周りでもそれに関わることが起きています。そして、家庭内暴力のみでなくいじめなどでも困っている人がいたら、進

んで相談に乗り、一人でも多くの味方になる。それが今後より良い社会につながると私は思います。

鎌倉市長賞

湘南地区大会奨励賞

「偏見」

鎌倉市立岩瀬中学校 三年

金井 葵海

「そういうものでしょ。」

私が小学校の頃、言っていた言葉。身の周りでも聞いていた言葉。だが、この言葉ではみえないものがある。

私は動きやすくて、かつこいいズボンが好きだった。スカートも好きだったけれど、スカートはひらひらしていて好んで着ることは無かった。ところが、周りを見るとズボンは男子が着ていたし、女の子はスカートをよく着ていた。特に気にしなかった。私はズボンが好きだったから。

図書室で漫画を読んでいた。『かいけつゾロリ』という漫画。

私はその漫画がおもしろくて好きだった。ある時、授業で違う本を借りようと思い、その漫画の置いてある本棚の前に立っていた。その時、

『『かいけつゾロリ』読んでいるの？それ男子が読む漫画でしょ。』

心が一瞬、きゅつと締めつけられたように痛くなった。少し戸惑いながら訊いてみた。

「何で？」

「えー、だって女子っぽくない？男子が読みそうな本じゃん。」

「男子っぽい読まない方が良いの？」

「うん。だって、そういうもんじゃん。」

少し笑っていた。女子が男子みたいな本を読むことはおかしいの？何でおかしいの？そう思った。でも、おかしいと思われるのは嫌だった。だから、『かいけつゾロリ』は読まなくなった。

図書室にも行かなくなった。私は、その時にそれは「そういうもの」だということを知った。

名字もそうだった。

「結婚したら何で男の人の名字になるの？女の人の名字が残らなくなっちゃうよ。」

「何でだろうね。でも、女の人の名字の人もいるけど多いよね。男の人の名字をとる人。」

「何で？」

「それは分からないよ。」

そう言った。「そういうもの」だと理由も無しに理解した。

今まで沢山そういうことがあった。しかし全て「そういうもの」「こういうもの」だと決めつけた。誰が言ったのか分からないけれど、みんなそうだったから。しかし、だからといって意識していた訳でもない。知らないうちに、無意識に「そういうもの」だと思っていた。「そういうもの」この言葉をどう思うっている訳でもなければ深い意味も無い。でも、それは一つの誤魔化し方なのかもしれない。服も本も名字も何の根拠も無いけれど、ただただ、

「そういうもの」

だと思っていた。そうやって過ごしてきた。

しかし、今は知っている。私が常識と思っていたこと、少し心が締めつけられた思いをしたこと、これらは偏見だったのだということ。

偏見は気づかないような些細なところに存在し、知らないうちに誰かの好きや自由を奪ってしまう。そして、それによって傷つく人がいる。

「そういうもの」

この言葉の重さを私は知っている。

この先「そういうものでしょ。」その言葉を言われたたら、勇気を持って伝える

「私はこれが好きだから。」と。



鎌倉市教育委員会賞

三人の自分

鎌倉市立第一中学校 三年

佐藤 功己

僕には三つの名前がある。三つの大きな岐路とともに。

僕が五歳の時、両親が離婚した。僕は幼いながらどういう事なのか、よく理解できた事をまるで昨日のように覚えている。不安や寂しさに押し潰されそうになった初めての経験。僕は母に引き取られ、母親の地元へ引越し、苗字が変わった。これが僕の一つ目の岐路だ。

苗字が変わっても、全く実感が湧かなかった。小さい頃から病院や幼稚園などの様々な場所で聞かれるたび、元気いっぱい笑顔で答えていた名前が急に変わったのだ。来年からは小学生。幸い、引越しをしたことにより、気持ちには楽になったものの、早く新しい名前に慣れないといけないと思い、必死に練習をする日々だった。

小学校へ入学し、自己紹介で名前を言う時はとても緊張した。しかし、そんな心配は要らず、練習をした通りに答えることができた。それからは自信が付き、気がつけばそれが普通となっていた。

そして、小学校五年生になるまでの約五年間、毎日のように

言っている自分の名前に愛着が湧いてきた。自分に沢山の自信を持たせてくれた名前だから。大好きな自分と大好きな名前。とても気に入って、一生このままだと思っていた。

五年生の春休み明け。僕の母は再婚した。これが、僕の二つ目の岐路である。

再婚することには大賛成。嬉しい気持ちでいっぱいだったが、僕には一つ大きな問題があった。「名前」をどうするか。自分の親が再婚をするということは、名前が変わること。五年間過ごしてみて、大好きになった名前をまた変えなければならぬことは、とても受け入れられなかった。

正直、僕は名前が変わることが嫌だった。両親に直接お願いしたこともあれば、自分で調べたこともある。しかし、僕だけが旧姓を名乗るのは難しかった。家族の前では、いつも通りであるように見せていた。でも、一人になった時や夜寝る時に泣いたり、学校などで自分の名前を言うときには、足が勝手に震えることだってあった。ただただ、また名前が変わることへの不安と悲しみは大きかった。

僕は決心をして、戸籍上の名前を変えたものの、小学校では先生方や両親の配慮により、旧姓でいられることになり、肩の荷が一気に降りたかのように不安から解放され、晴れ晴れとした気持ちになった。

そこから一年間、何も考えずに過ごすことができた。もしかしたら、自分の状況から目を背けるために無意識に考えないようにしていたかもしれない。そんな中、三度目の岐路が訪れた。小学校を卒業したら名前をどうするのか。もちろん、中学校に相談をすれば、対応してくれただろう。だが、僕の中には先延ばしにしているという気持ちが大きくあった。

選んだのは、名前を変えろということ。僕の中学校は、多くの同級生が小学校からの持ち上がりなので必然的に名前が変わったということがわかる。かつて、知り合いが全くなかった時とは違う為、これまでの何倍もの恐怖、不安に押しつぶされそうになった。

中学校に入学すると、不思議そうに、
「なんで苗字が変わったの。」

という質問を沢山された。一番心配していた質問に戸惑うどころか、心を抉られたような気持ちでいっぱいだった。悪気がなくても、前の名前で呼ばれてしまうこともあった。もちろん受け入れてくれる人もいたが、みんながみんなそういうわけではなかった。

とても辛かったが今となっては、僕自身を成長させてくれた

経験であったと思う。そんな中で、僕の中に新たな思いが生まれてきた。「同じような境遇になった人達に、僕と同じような悲しく辛い思いをして欲しくない。」

今は時代も変わりつつあり、離婚や再婚が多くなってきているということをよく耳にする。また、結婚をしたくない理由として、名前が変わりたくないからだという人もいる。

しかし、それは大人達だけの問題ではなく、子供達の問題でもあるのだ。僕は望んだ姓で生きられるような世の中になってほしいと思っている。夫婦別姓や旧姓でいる事を望む人が望んだ姓で生活できるような世の中になったのなら、僕達皆の選択が広がると思う。そして、周りがその人の選択を受け入れていくことも大切だ。名前は、「自分」を表現するものである。そんな大切なものは簡単には変えられないものなのである。「自由に選択して、自分らしく自分が望むように暮らせること。」そして、「相手の色々な選択を受け入れられる社会であること。」それが、僕が望む幸せへの第一歩だ。

鎌倉市教育委員会賞

誰もが幸せになるために

鎌倉市立岩瀬中学校 三年

実藤 直生

僕は中学校一年生の一時期、学校へ行けなくなりました。きっかけは当時のクラスメイトからのちょっかいでした。学校へ行けなくなった十月頃から二年生へ進級するまでの間、一度もクラスの中に戻ることはできませんでした。「ちょっかい」というのは、物を隠されたり、体を触られたりするなどといったことで、「やめて。」と言っても中々やめてもらえず、あまりにも耐えることができずに誰かに相談するよりも先に限界を迎えてしまったことで、学校へ行くことができなくなってしまうのです。その後はあまり体調も優れなかったり、辛かった記憶が蘇ることもありました。家族以外の人と話す機会というのが極端に少なくなってコミュニケーションが取りづらくなりました。けれども現在は、その友達と話し合いを経て楽しく話せる関係になり、僕自身も普段通り学校へと通っています。僕はこの経験をして感じたことがあり、それは「思い込み」と「感じ方」についてです。

友達は当時、僕と仲良くなりたかったためにとった手段が結果的に嫌がらせのようになってしまったと知りました。その時

に僕が口にした「やめて。」は遊んでいる時に発するような感覚で捉えられていたのかもしれないとお互いの思い違いに着目できました。僕もどうしてこんなにも嫌だと言っているのにやめてくれないのだろうと感じていたので、自分の感覚を押しつけて考えていたのだと相手側の気持ちを考えることができたきっかけにもなりました。

これ以降、自分で大丈夫だろうと思っても、感じ方次第で深く相手を傷つけてしまうというリスクが常に隣合っていることを忘れずに友達たちと接することになっています。

しかしそれだけではなく、もう一つ考えなければならぬことがあると僕は思います。それは、奪われてしまう権利についてです。日本で今、不登校とわかっている人だけでも約三十万人もの小中学生がいると言われています。その中で、権利について具体例を挙げると、『教育』についてです。学校に行けずに教育を受けられない人にどうやってその機会が失われないようにするのか考えることが必要だと思います。実際に僕は塾などに通っていなかったもので、自分で勉強するには限界があり、

学校へ戻った時に苦労した経験もあります。様々な自由がある中で、勉強をするしないは個人の判断によって決められるものでもあるが、その機会自体が失われる、つまりしたくても勉強ができない、という環境が生まれてしまうことが残念に感じます。

僕は、これらをきっかけに、相手の気持ちを考えることはもちろん、そこから互いだけではなく、困っている人を自分から見つけられるような周りに目を配れるようにする、さらにこれを広げられるような影響を与えられる人になりたいと強く思います。そして、ここで経験したようなことをまた目にするところがあるならば、その人の権利が失われることの無いよう、声をかけられる、挙げられる人にもなりたいと思います。



鎌倉市教育委員会賞

「身近な差別」

鎌倉市立岩瀬中学校 三年

伴 奈美

私はこの人権作文を書くにあたって幼かったときの出来事を思い出した。

私には幼馴染がいる。その子はYちゃんという女の子でとても小さかった頃から一緒に遊んできた大の仲良しな子だ。そんなYちゃんには上半身に生まれつきのアザがあった。それは小さなものではなく、首、腕、手、背中で見られた大きなものだった。私はそんな事気にしていなかったのだが、それを気にしてしまう子も中にはいた。例えば夏の日、暑かったので半袖を着ていたら、何人かの友達がアザを見て「何でこうなっているの。」「なんかいやだな。」というように言われてしまったらしい。そんな事もあって、みんなでプールに入るときは必ず長袖の水着を着るようになったり、アザはかくすものなんだと考えるようになってしまった。私はYちゃんと仲が良かったこともあり、この出来事が深く印象に残っている。あの時に初めて人権について考えたのだと思う。そして他人を差別してはいけないし、一生したくないと思い、幼いながらに決意した記憶がある。

そしてそれから何年か経ち、コロナの流行が始まった。その時の私含めクラスメイトはMちゃんの家で救急車がとまっていたらしいとか、Kくんがコロナになったらいいとか、Hちゃんの家族がコロナになったかもしれないから近づかないようにしようとか、差別につながっていたであろうことを普通に話したり行っていたりしていた。あの時の私たちはそれが普通のことだと思いついていた。しかしある日のYちゃんとの帰り道、コロナについて話したときがあった。Yちゃんは本当に平然としたようすである一言を放った。「何でそんな差別するみたいなことしてるんだろうね。」私はこのたった一言で昔のことを思い出した。そういえば自分は差別なんてしないと決めたじゃないか、と。Yちゃんがきっかけになって思い出した自分が情けなかったし、もっと幼かったときには気付けたのに、高学年になった自分は何で気付けなかったんだろうと思った。これを機に、人権について以前より深く考えるようになった。自分でも知らないうちに差別してしまっていた事というのはよくあると思う。そして現代は、インターネットも普及して

いて昔よりも外国の人たちとの交流が増えるなど、他人とコミュニケーションをとる機会が増えたように感じる。つまり、人を簡単に差別できてしまう環境が常に身近にあるということだ。だから、この先はより、人権について考えることが必要な社会に変化していくだろう。そんな社会で生きていく私たちは、他人についてもっと深く考えるべきだと思った。

私が何より伝えたいことは、自分たちが放った何気ない一言で傷付いている人がいるかもしれないということ。私は同じ思いを二度もくり返したくはない。誰でも気付けば私と同じ気持ちになるはずだと思う。そうなる前にもっと自分の周りの人たちについて考えてみるのはどうだろうか。そして私は差別のない社会を自分たちの手でつくっていききたいと強く思う。＼ちやんも、私自身も、世界中の人たちが後悔することのないように。

鎌倉市人権擁護委員会会長賞

助け合いで作れる人権

鎌倉市立深沢中学校 三年

鈴木 海晴

まず人権とは、すべての人間が生まれながらに持っている人間として幸せに生きていくための権利だとされています。現在の日本では、人権は憲法で守られるべきものとして定められていることもあり、多くの場面でこれが尊重されています。しかし、一部、障害がある方や高齢者の方などが、暮らしやすい設備が整っていないことや、時には差別を受けてしまうといったことにより、肩身が狭い思いをしていることがあります。

僕がこのことをはじめて意識したのは中学一年生のころ、友人と遊びに行った時のことです。駅のバス停で、バスを待っていたときに、目の見えない人が落とした物を拾えずに困っていました。はじめ自分たちは「誰か助けるだろう」と他人任せになっていたのですが、少しして誰も助けていなかったため、勇気を出して友人と拾い、手渡しました。この経験から、「障害などの特性がある人は生活する上で過ごしづらい場面があるけれど、周囲の助けによって過ごしづらさを軽減できるんだな」と感じました。

僕は、高齢者の方や、障害者の方が現在過ごしづらく、肩身

が狭い場面があるのは、この「助ける」という行動をする人がとても少なくなってしまったことにあると思います。実際、僕たちもはじめは助けるのを他人任せにしてしまったことに加え、母に前「人の多い電車で体調の悪そうな女性がいるが皆何もしない」というネットの記事を見せてもらったことがあります。ではなぜ皆助けないのでしょうか。

僕はその一番の理由は「不安がある」ことだと思います。例えば、最近では電車で老人に席を譲ろうとしたら「老人扱いしないでほしい」と断られた、という話をよく聞きます。僕はこのような状況をなくすためには、「助け合い」を少しずつ増やし、世の中にありふれたものにする必要があると思います。これは高齢であることや障害があること関係なしに、「困っている人がいたら助ける」「助けられたら有難くたよらせてもらう」ということを繰り返し、助けることにより実現できると思います。もしこれが実現できれば、助けることと助けてもらうことの抵抗がなくなり、全ての人にとって暮らしやすい世界になると思います。また、障害のある方や高齢者の方が使いにくい、まだ

バリアフリーの設備が整っていないような場所でもこれらの
方々がより活動しやすくなると思います。

このように、障害のある方や高齢者の方が過ごしやすいよう
な、一人一人の人権を尊重した社会を作ることとは、私たちにと
っても過ごしやすい社会を作ることにつながると思います。そ
のため、僕は、これから少しずつ、人を「助ける」機会を増や
して国民の一人としてよい社会を作るために努力したいと思います。



鎌倉市人権擁護委員会会長賞

多様性の必要性

鎌倉市立第一中学校 三年

中島 奈海

「今は多様性の時代だから。」

なんて言葉をよく目にする。きつと、認めてあげないなどと
いう同情からくるものだ。私はこの言葉を真っ向から受け止めることはできなかった。

近年世界共通で広まる多様性。一九六〇年のアメリカで「Diversity」の概念が誕生しそれ以降広く浸透してきた。日本でも当然のように肯定され使われてきたのだ。これからも多様性という言葉から人権の理解が広まっていくのかもしれない。

一般的に多様性とは、組織や集団において人種や性別、宗教、価値観などが異なるさまざまな属性の人材を迎え入れ、共存しながらそれぞれが持つ能力や考えを活かす取り組みとして認識をされてきた。

私がいかによく目にするようになり多様性を知るようになったのは、SNSがきっかけである。世界全体が一体となって交流を行うことができるネットの場は多様性への理解が進む場ともなってきたのだろう。そこから調べていくようになると私はとある取り組みに関心を持った。その取り組みという

のはアメリカの子供向け教育番組、「セサミストリート」である。セサミストリートは日本での知名度も高く、子供からの人気を得ている。そんな番組だがその背景にはとある想いが込められていたことを知った。セサミストリートには現段階で十種以上の個性あふれるキャラクターが登場し、各キャラクターの見た目以外に細部の設定にも「違い」が表現されていたのだ。

例えば自閉症、視覚・聴覚・知覚障害、養子、里親、親が離婚・軍人・囚人などの数々の事情をキャラクター達は抱えている。このアメリカの非営利団体、セサミワークショップは番組を通して子供達に社会問題や多様性を伝えているのだ。当然、難しい用語は使わずキャラクター同士が会話し寄り添いながら行動していくという描写を画面を通して表現している。私は多様性などの言葉を知らず、使わずとも人権への理解は十分に可能であるのではないかということに気付いた。一体このキャラクターに裏付けられた背景や設定を知っていた人がどれほどいるのだろうか。

多様性という言葉に限らず、差別や国籍、人種、LGBTQ

などのまるで人をあらゆる方向から分類づけているような型にはめた言葉の数々。これらを同情から突きつけたり、突きつけられたり。特別ななんて存在しなければ普通も存在しない。別々の人間で、別々の人生を歩む以上、全員が同じでもあり違うのだ。自分が呼ばれる立場になったり、新たに人と違う言いたくない部分が生まれるかもしれない。言葉は凶器になり得るからこそ、良かれと思ってかけた言葉に自分が後悔し傷つくかもしれない。たった一言で一生癒えない傷を負う人がいる中、これらの言葉にいいように言いくるめられ生きていくのは果たして正しいのだろうか。

私は簡単に多様性を口にすることはしたくないし、多様性という言葉に必要性を感じない。本人がまだ認識していない中悪気なく投げかけられた一言で初めて知る可能性も大いにあるわけで「悪気がない」など形として刻みつけられた以上全く関係がなくなる。むしろ、無意識の方が多数の人に何度も何度も毒を振り撒いてしまうのだ。重要なのはその発端を作らないこと。

私はこれから先、人と違うことが当たり前になる世界を強く望む。「当たり前」などどれほど綺麗事かは分かっている。

それでも私はそんな世界への一步を踏み出す努力をする。

鎌倉市人権擁護委員会会長賞

向日葵から学ぶこと

鎌倉市立深沢中学校 三年

齊藤 小春

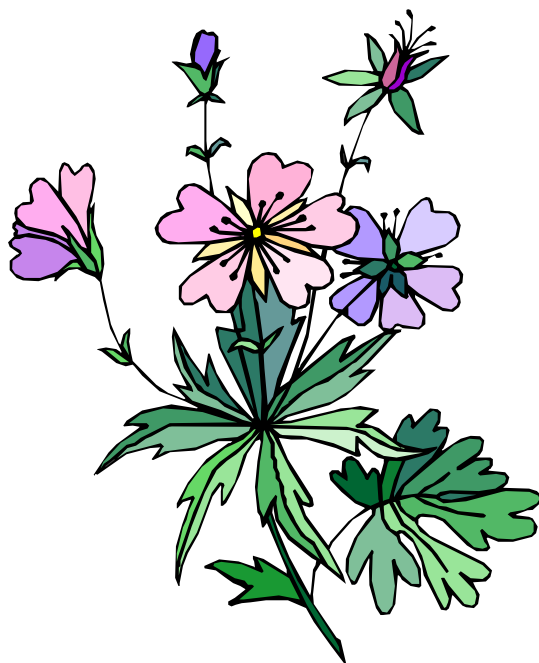
私の一番好きな花は「向日葵」です。向日葵は、太陽の光を浴びて、明るく元気に咲くお花です。その大きな黄色い花びらは見る人を笑顔にし、希望を感じさせてくれます。自分を支えてくれる太陽にしっかりと向かうことで、その姿をみた人々にエネルギーを与える存在です。こうした向日葵の姿は、私がどのように人を大切に生きるべきなのかを教えてくださいました。

私は初めて向日葵をみたとき、その力強い姿に心を奪われました。広い畑に連なる向日葵の背が高くて、まるで元気をくれる太陽の化身のようでした。青い空の下、元気に咲く向日葵を見つめていると、いつの間にか心がほっこりして、自然と笑顔になっていました。向日葵は、自分に自信を持つことや、周りの人を大切に思うことの大事さを教えてくれる存在だと感じ、私たちも人を大切にする社会を目指すために、周りの人々や自分たちの存在を大切にしなければなりません。向日葵のように私たちも誰もが大切にされ、尊重されることの重要性を理解していくことが大切であると感じます。思い出すのは、私よりも小さい子どもたちの会話です。ある日、一人の男の子が公園に

いました。すると数人の男の子たちが公園に来て楽しそうに遊んでいました。数人の男の子のうちの最年長の子が「一緒に遊ぼうよ」と声をかけていました。その姿はまるで向日葵が太陽に向かうように、みんながその子を支えているのを感じました。このように、周りの人々の手を差し伸べることで、友情の輪を広げることができるのです。しかし、大人になると沢山のことに追われるようになって、余裕がなくなってしまう人が一定数いらっしゃると思います。そんな人たちへ、そんな状況の中でも大切なことを思い出してほしいと思います。たとえば、忙しい日々の中でちょっとした優しさや思いやりを持つことができれば、周りの人たちが少しずつ笑顔になっていくかもしれない。良いことも悪いことも巡り巡って必ず自分に返ってくる。この感情をもっと沢山の人が考えたと今後の社会に良い影響を与えることができると思います。

人権とは、すべての人が平等に扱われる権利のことです。向日葵が太陽の方向を向いて生きていくように、私たちも誰もが温かな心を持ち、自分らしく生きることを応援する必要があります。

ます。差別や暴力などが無い、みんなが安心して生活できる環境を作ることが、私たちが今後できることだと思います。そのために、私たち一人一人が向日葵のように明るくまっすぐに生きること、まわりの人々にも希望を与えることができるのです。向日葵が持っている力強さやエネルギーは私たちの行動にも反映させることができると思います。向日葵が太陽に向かうように、私たちも他の人々の権利を守ったり、支え合っていきたいです。みんなが向日葵のように、明るく自由に咲くことができる社会を目指していきたいと考えます。そのためにまず、私が笑顔を絶やさず、まわりを照らし、人が人へと希望を広げていけたらいいと思います。これからいつも心に向日葵を咲かせ、暖かく強い気持ちで人と関わっていきたいです。



鎌倉市人権擁護委員会奨励賞一覧

「腕の傷」

鎌倉市立腰越中学校

三年 石渡 凜

人種差別

鎌倉市立腰越中学校

三年 平野 祥吾

無責任な言葉

鎌倉市立玉縄中学校

三年 白井 悠美

「みんな違ってみんないい」

鎌倉市立腰越中学校

三年 高橋 零

「人権」の重要性と必要性とは

鎌倉市立腰越中学校

三年 木村 海晴

人権について

鎌倉市立玉縄中学校

三年 伊賀 しずく

第43回全国中学生人権作文コンテスト

鎌倉市審査会入賞者表彰式



＊開催日 令和6年(2024年)11月15日(金)

＊場 所 鎌倉市役所 市議会本会議場

＊出席者 入賞された中学生の皆さん、
松尾崇市長、高橋洋平教育長、人権擁護委員

当日は、入賞した中学生14名が出席し、市長から鎌倉市長賞、教育長から鎌倉市教育委員会賞、人権擁護委員会会長から鎌倉市人権擁護委員会会長賞および奨励賞をそれぞれ表彰しました。また、鎌倉市長賞受賞者による作文朗読を行いました。

人権擁護委員とは

人権擁護委員制度は、様々な分野の人たちが、地域の中で人権尊重思想を広め、人権を擁護していくという考えから昭和24年に創設されました。

人権擁護委員は、市長が議会の意見を聞いて推薦し、法務大臣が委嘱した民間の人たちです。基本的人権を守り、人権が大切なものであることを知ってもらうため、地域に密着した人権啓発活動を実施し、人権への正しい理解と普及を図っています。

鎌倉市には、現在14名の人権擁護委員が配置されています。人権相談や中学生人権作文コンテスト、保育園などにおける人権教育紙芝居、人権啓発街頭キャンペーンなど、日々積極的な人権啓発活動を行っています。

【鎌倉市の人権擁護委員氏名】

山田 隆二	菱田 恵子
岡崎 美奈子	加藤 三恵子
眞壁 成子	村上 史
曾根 民子	内海 春信
新井 貴子	太田 顕博
三留 利夫	植松 育子
渡邊 義忠	波多 周

平和都市宣言

われわれは、
日本国憲法を貫く平和精神に基いて、
核兵器の禁止と世界恒久平和の確立のために、
全世界の人々と相協力してその実現を期する。
多くの歴史的遺跡と文化的遺産を持つ鎌倉市は、
ここに永久に平和都市であることを宣言する。

昭和33年8月10日 鎌倉市

鎌倉市民憲章

制定 昭和48年11月3日

前文

鎌倉は、海と山の美しい自然環境とゆたかな歴史的遺産をもつ古都であり、わたくしたち市民のふるさとです。

すでに平和都市であることを宣言したわたくしたちは、平和を信条とし、世界の国々との友好に努めるとともに、わたくしたちの鎌倉がその風格を保ち、さらに高度の文化都市として発展することを願い、ここに市民憲章を定めます。

本文

- Ⅰ わたくしたちは、お互いの友愛と連帯意識を深め、すすんで市政に参加し、住民自治を確立します。
- Ⅰ わたくしたちは、健康でゆたかな市民生活をより向上させるため、教育・文化・福祉の充実に努めます。
- Ⅰ わたくしたちは、鎌倉の歴史的遺産と自然及び生活環境を破壊から守り、責任をもってこれを後世に伝えます。
- Ⅰ わたくしたちは、各地域それぞれの特性を生かし、調和と活力のあるまちづくりに努めます。
- Ⅰ わたくしたちは、鎌倉が世界の鎌倉であることを誇りとし、訪れる人々に良識と善意をもって接します。

第43回全国中学生人権作文コンテスト神奈川県大会

主催：横浜地方法務局・神奈川県人権擁護委員連合会

令和7年1月発行

事務局：鎌倉市共生共創部地域共生課